



鳥取県米子市

米子城跡 9 遺跡

1997. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

長子成跡9四跡

1997. 3



0.2
on
0)

序

鳥取県西部に位置する米子市は古代からの遺跡の宝庫で、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。

近年、市街地の開発に伴う発掘調査によって米子城下町の状況が少しずつ明らかとなってきました。

この度、報告致します米子城跡9遺跡は中国電力株式会社による米子中央変電所新設工事に伴って発掘調査を実施したもので、陶磁器をはじめとする多くの遺物が出土し、井戸等の遺構が検出されました。これらは当時の様子を伝えてくれる大変貴重な資料となるものと思われます。

これらの資料が今後の調査研究及び教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくなれば役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました中国電力株式会社並びに地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成9年3月

財團法人 米子市教育文化事業団

理事長 森田 隆朝

例　　言

- 1 本書は鳥取県米子市加茂町2丁目54番地他において実施した中国電力株式会社米子中央変電所新設工事に伴う米子城跡9遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は中国電力株式会社の委託を受けて（財）米子市教育文化事業団が実施した。
- 3 調査は（財）米子市教育文化事業団調査員 高橋浩樹、平木裕子が担当し、福嶋昌子、植佐知子がこれを補佐した。
- 4 遺物の実測は篠田明子、仲田いづみ、森井あづさが行い、浄書は森井が行った。
- 5 本書に用いた方位はすべて座標北（G. N）を示し、標高は標準海拔高度である。座標値は国土座標第V系を用いた。
- 6 本書は高橋が執筆、編集した。
- 7 出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。
- 8 調査にあたっては珪藻、花粉分析を川崎地質株式会社に委託し、陶磁器の鑑定については広島県立美術館主任学芸員村上 勇氏にお願いした。記して感謝致します。
- 9 現地調査及び整理作業には下記の方々の参加を得た。記して感謝致します。

(50音順敬称略)

(現地調査)

生田 充、石橋幹夫、金川節代、鐘築千恵子、倉敷 精、桑本貴子、陶山富子、田中恵子、種大輔、寺西 保、虎尾一明、長尾千晶、中島 洋、中村久男、西本友一、浜先智恵子、原口佳智子、福一誠二、二岡貞夫、松本幸延、村岡美津子

(整理作業)

加藤正子、小林美恵子、篠田明子、陶山富子、徳中繁野、長尾千晶、仲田いづみ、前田光江、松本雅子、森井あづさ、矢野早苗、頬田恒子

目 次

1 調査の契機	1
2 位置と環境	1
3 調査の概要	4
4 検出遺構	4
5 出土遺物	16
6 まとめ	36

挿 図 目 次

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図 (1/5,000)	2
第2図 星敷の変遷復元模式図	3
第3図 北東壁土層図 (1/60)	5~6
第4図 遺構配置図 (1/200)	7~8
第5図 井戸実測図 (1/40)	10
第6図 井戸実測図 (1/40)	11
第7図 井戸実測図 (1/30)	12
第8図 井戸実測図 (1/30)	13
第9図 SD-1 2 実測図 (1/20)	15
第10図 SD-0 3 出土磁器実測図 (1/3)	26
第11図 第2層出土磁器実測図 (1/3)	27
第12図 SD-0 3 出土陶器実測図 (1/3)	28
第13図 第2層出土陶器実測図 (1/3)	29
第14図 摺鉢実測図 (1/4)	30
第15図 かわらけ・灯明皿実測図 (1/3)	31
第16図 焙烙・瓦質土器実測図 (1/4)	32
第17図 瓦実測図 (1/4)	33
第18図 木製品・漆器実測図 (1/3)	34
第19図 土錐・石製品・金属製品実測図 (1/2)	35

図版目次

- 図版1 北西側調査区全景
南東側調査区全景
- 図版2 SE-01
SE-02
SE-03
- 図版3 SE-04
SE-05
SE-06
- 図版4 SE-07
SE-09
SE-10
- 図版5 SD-02・03・08
SD-12
SD-13
- 図版6 SD-03出土磁器
- 図版7 第2層出土磁器
- 図版8 SD-03出土陶器
- 図版9 SD-03出土陶器
- 図版10 第2層出土陶器
- 図版11 第2層出土陶器
- 図版12 撥鉢
- 図版13 かわらけ・灯明皿
- 図版14 焰烙・瓦質土器
- 図版15 瓦

1 調査の契機

米子城跡 9 遺跡は中国電力株式会社による米子中央変電所新設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。調査地は米子市加茂町2丁目54番地他に所在し、当地は米子城跡外郭内に位置し、絵図等によって武家屋敷の存在が考えられ、さらに近接する場所（米子城跡1～8遺跡、久米第1遺跡）での発掘調査において江戸時代及びそれ以前の遺構、遺物を確認しており、事前の発掘調査が必要であることから、工事を行う中国電力株式会社と米子市教育委員会との遺跡の取扱いに関する協議の結果、発掘調査の実施を決定した。発掘調査は中国電力株式会社から委託を受け財団法人米子市教育文化事業団が実施した。調査は平成7年6月21日から10月17日までの期間を行った。調査面積は915m²である。

2 位置と環境

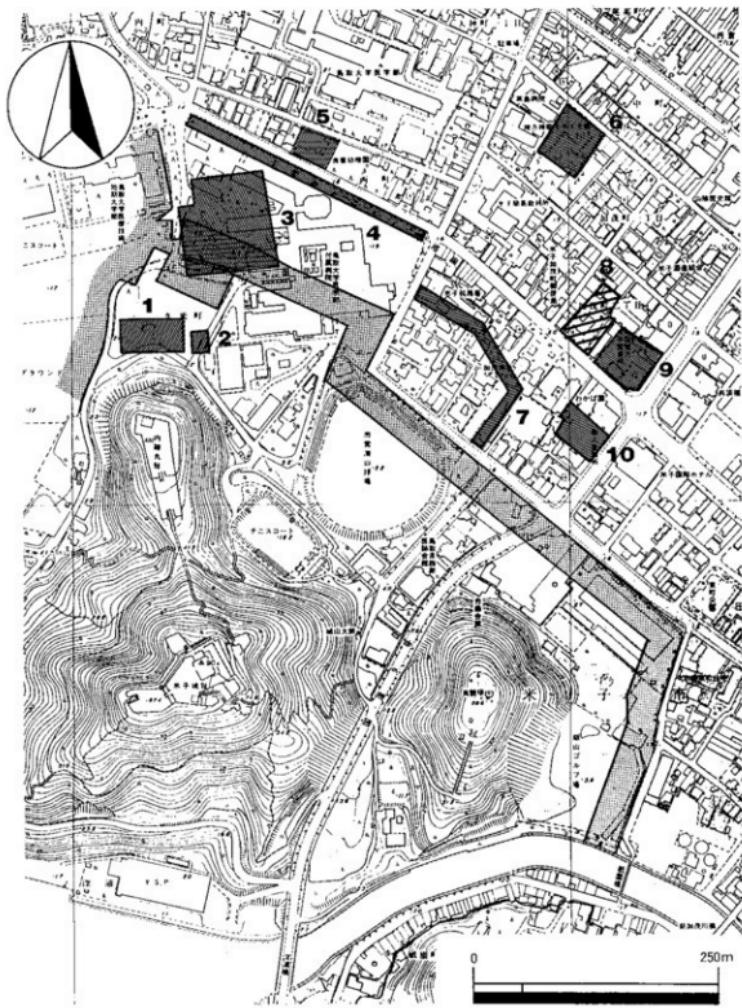
米子城跡はJR米子駅の北西にひろがる北東一南西1.0km、北西一南東1.2kmの城跡及び城下町で標高90mの湊山（城山）を中心にその山麓の北側と東側に内堀をめぐらせ、その外側には北郊を流れる加茂川の一部を利用した外堀をめぐらせている。

米子城の築城及び江戸時代以前の歴史的環境については他の報告書に譲り、ここでは絵図を中心調査地の歴史的環境及び武家屋敷の変遷についてみてみたい。

今回の調査地は内堀と外堀とのほぼ中間にあり、かつてこの地は宮ノ町と呼ばれていた。宮ノ町はほぼ東西に通る道筋に沿う125間の武家地で、地名は地内に加茂神社、八幡宮が鎮座することに由来する。「伯耆国米子平図」（宝永6年 1709）と「湊山金城米子新府」（享保5年 1720）では三社町、「伯州米子之図」では宮城町、「米子御城下夫々間数」では御社町と記されている。

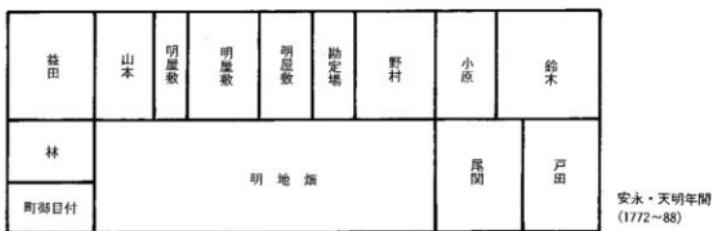
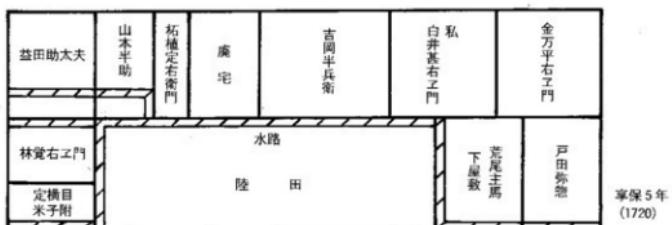
調査地における武家屋敷の変遷を絵図から復元、推定してみると、「伯耆国米子平図」、「湊山金城米子新府」では調査地は山本半助、柘植定右衛門、庵宅（空家）の3件の屋敷にまたがっているものと思われる。しかし、安永・天明年間（1772～88年）の絵図では山本の屋敷と庵宅（空家）はそのままであるが、柘植定右衛門の屋敷は明屋敷（空家）となったものと思われる。また、「米子城市図」（安政年間 1854～59年）では安永・天明年間の山本の屋敷とその北西に隣接する明屋敷（空家）は1つの屋敷地となり、さらにその北西に隣接する明屋敷（空家）は「屋敷」と記載されている。これらは「屋敷」と記載されているだけで人名は記載されておらず、この時点では2件とも空家となっていたものと思われる。

調査地の南東に隣接する米子城跡3遺跡では山本と益田の屋敷境界と思われる溝が検出されており、2棟の建物、4基の井戸も検出されている。



- | | |
|-----------|------------|
| 1 久米第1遺跡 | 6 米子城跡4遺跡 |
| 2 米子城跡5遺跡 | 7 米子城跡7遺跡 |
| 3 米子城跡1遺跡 | 8 米子城跡9遺跡 |
| 4 米子城跡6遺跡 | 9 米子城跡3遺跡 |
| 5 米子城跡2遺跡 | 10 米子城跡8遺跡 |

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図



第2図 屋敷の変遷復元模式図

3 調査の概要

調査は廃土置き場の都合上、最初に調査対象地の南東側約半分の調査を行った。南東側の調査を終了した後、これを埋め戻して廃土置き場とし、残りの北西側約半分の調査を行った。

基本層序はおおまかに6層に分けられ、ここでは便宜的に上層より第1～第6層とする。第1層は近代～現代の盛土で、その厚さは0.9～1.1mをはかる。第2層は幕末～明治の盛土と考えられ、多量の陶磁器が出土する。SD-02より南東側は既存の建物によって削平されている。第3層は細分すると2層から成り、さらに、SD-02、03を境にその北西側と南東側とでは土質が異なる。第3層はその上面が遺構検出面となっており、その標高は0.7～0.8mである。第4層は水成堆積層で、その厚さは1.4～1.8m以上をはかる。第4層は細分が可能であるがおおまかにみると、上層は主に砂、下層は主に粘土とシルトが堆積する。第4層の出土遺物の大部分は土師質土器、かわらけで、陶磁器の出土はごくわずかである。第5層も水成堆積層で、多量の貝が混じり、縄文晩期の土器が出土している。第6層は南西から北東方向に傾斜する岩礁性の岩盤で、調査区の南西端では標高-0.7mでこの岩盤を検出した。

今回の調査では柵列6条、溝13条、井戸10基、土坑27基、ピット77基を検出した。

4 検出遺構

井 戸

井戸は10基検出した。いずれも石組の井戸で、SE-03、05、08、06、07、10とSE-04、02、01、09の2つの帶状に分布している。

SE-01（第5図）

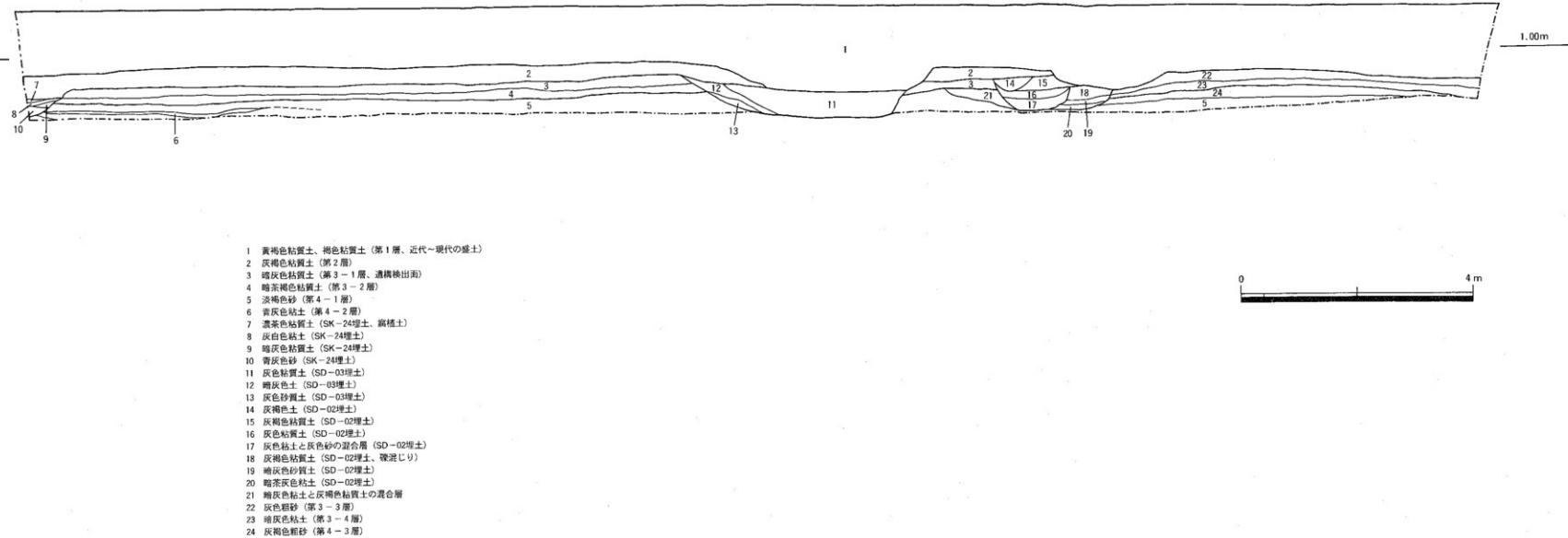
SE-01は堀方を確認できなかったが、石組の内法径は長径0.8m、短径0.7m、深さ1.1mをはかり、石組は現状で6段積みである。SE-01からは備前、肥前系磁器、唐津皿等が出土した。時期は17世紀前半である。

SE-02（第5図）

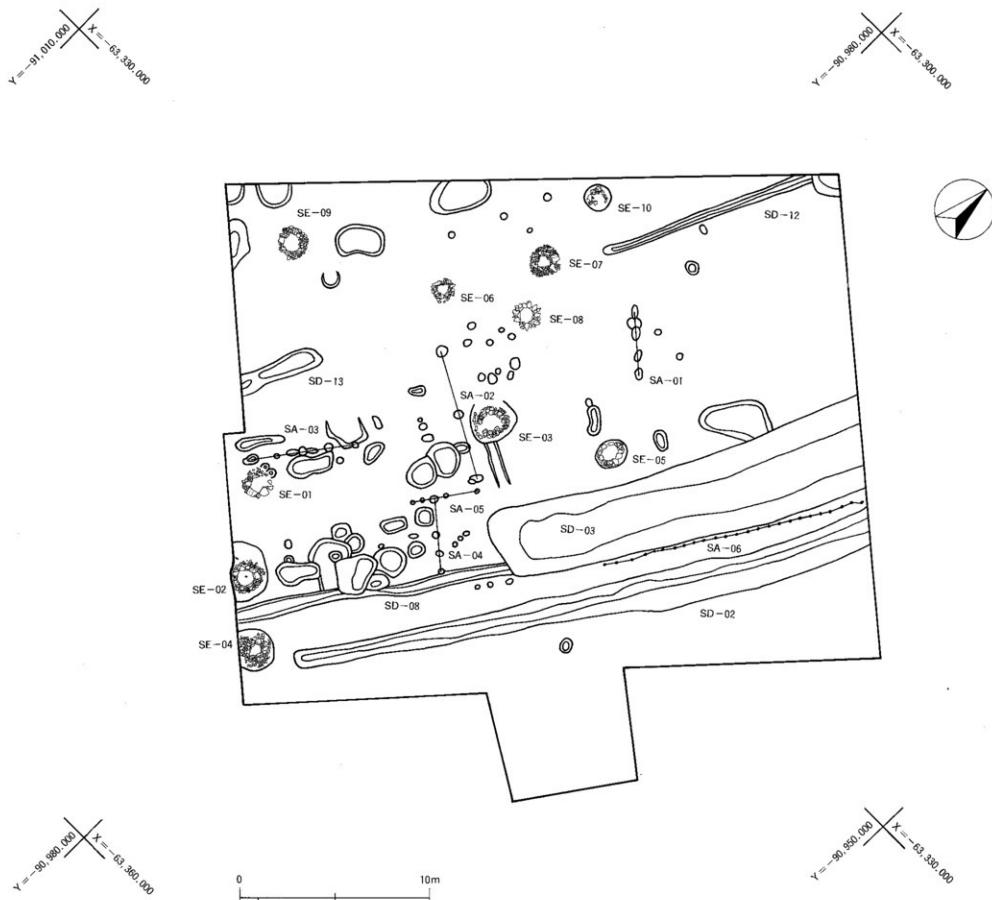
SE-02は堀方の平面形態が隅丸方形気味で、堀方の直径は3.1mをはかる。石組の内法径0.8m、深さ1.0mをはかり、石組は現状で4段積みである。SE-02からは磁器等が出土した。時期は明治である。

SE-03（第6図）

SE-03は堀方の平面形態が不整形な円形を呈し、堀方の直径2.4m、深さ0.8mをはかる。石組の内法径は長径1.0m、短径0.8m、深さ0.3mをはかり、石組は1段のみ残存する。SE-03からは遺物は出土しなかった。時期は不明である。



第3図 北東壁土層図



第4図 遺構配置図

SE-04（第6図）

SE-04は堀方の平面形態が円形を呈し、堀方の直径2.1mをはかる。石組の内法径0.7m、深さ1.0mをはかり、石組は現状で2～3段積みである。SE-04からは肥前系磁器、陶器等が出土した。時期は幕末～明治である。

SE-05（第7図）

SE-05は堀方の平面形態が橢円形を呈し、堀方の直径は長径1.4m、短径1.3m、深さ0.4mをはかる。石組の内法径は長径0.8m、短径0.6m、深さ0.3mをはかり、石組は現状で6段積みである。SE-05からは遺物は出土しなかった。時期は不明である。

SE-06（第7図）

SE-06は堀方を確認できなかったが、石組の内法径は長径0.7m、短径0.5m、深さ0.4mをはかり、石組は1段のみ残存する。SE-06からは胎土目の唐津皿が出土した。時期は17世紀前半である。

SE-07（第7図）

SE-07は堀方を確認できなかったが、石組の内法径0.7m、深さ1.0mをはかり、石組は現状で6段積みである。SE-07からは砂目の唐津皿、唐津碗等が出土した。時期は17世紀前半～中頃である。

SE-08（第8図）

SE-08は堀方を確認できなかったが、石組の内法径0.7m、深さ0.5mをはかり、石組は現状で3段積みである。SE-08からは肥前系磁器、志野等が出土した。時期は幕末である。

SE-09（第8図）

SE-09は堀方を確認できなかったが、石組の内法径0.8m、深さ1.0mをはかり、石組は現状で5～8段積みである。SE-09からは遺物は出土しなかった。時期は不明である。

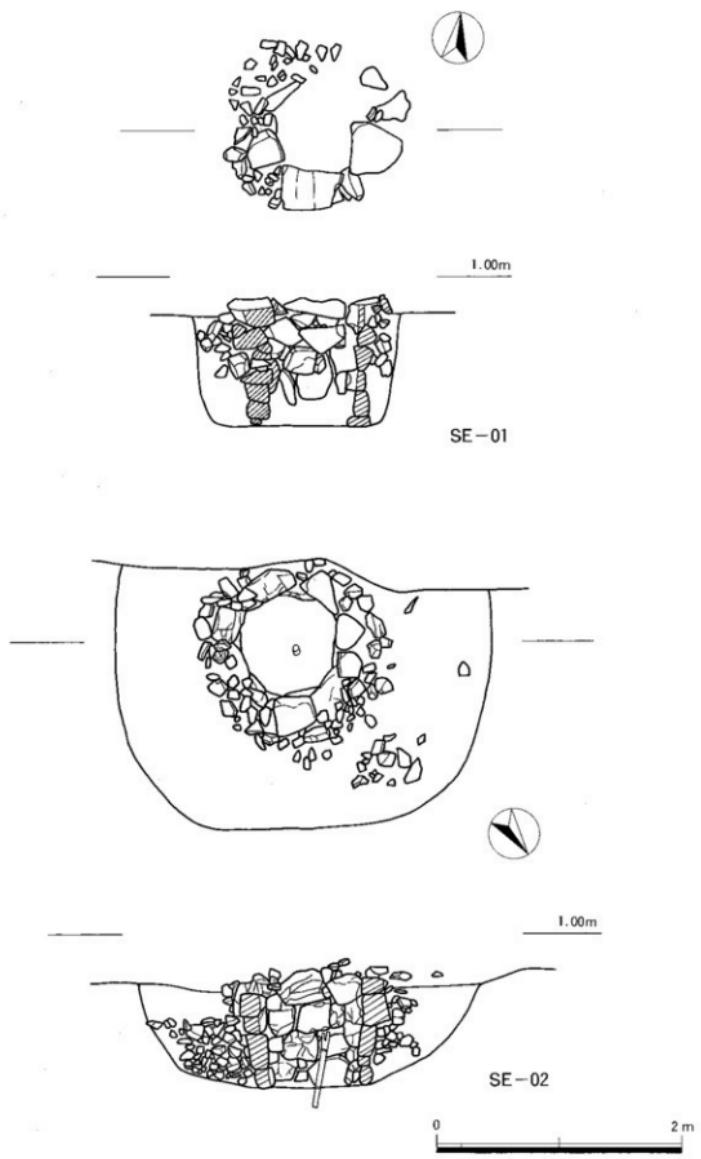
SE-10（第8図）

SE-10は、堀方の平面形態が円形を呈し、堀方の直径は長径1.3m、短径1.2mをはかる。石組の内法径0.6m、深さ0.4mをはかり、石組は1～2段のみ残存する。SE-10からは遺物は出土しなかった。時期は不明である。

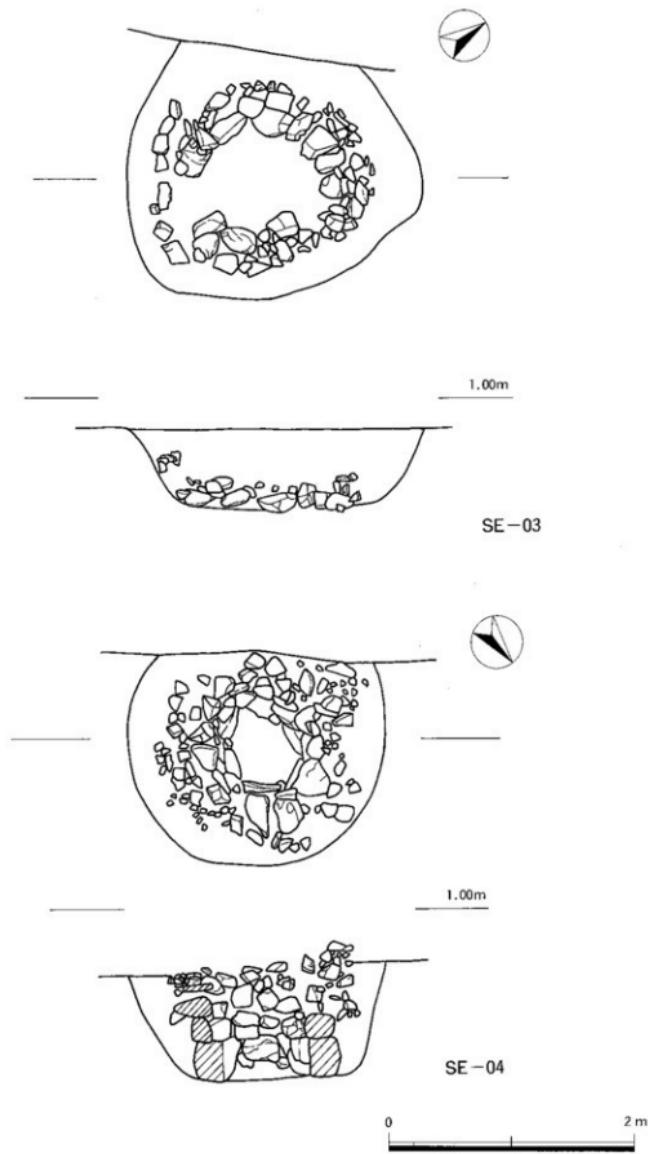
溝

溝は13条検出したが、ここでは屋敷境界を示す可能性があるSD-02、03、08、12、13について報告したい。これらは主軸からSD-02、03、08(N-29～35°-E)、SD-12、13(N-23～25°-E)の2つに大きく分けられる。両者とも17世紀前半には併存していたものと思われるが、後者は17世紀中頃には廃絶したものと思われる。これに対して前者はSD-08が18世紀には廃絶しているが、SD-02、03は明治まで存在している。

SD-02、03、08は宝永6年、享保5年、安永・天明年間の絵図の山本とその北西に隣接する屋敷との境界を示すものと思われ、SD-03は幅、深さとも大きく、単に屋敷境界としてだけではなく水路または運河として利用されていた可能性がある。



第5図 井戸実測図



第6図 井戸実測図



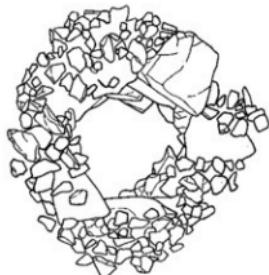
0.80m



SE-05



SE-06



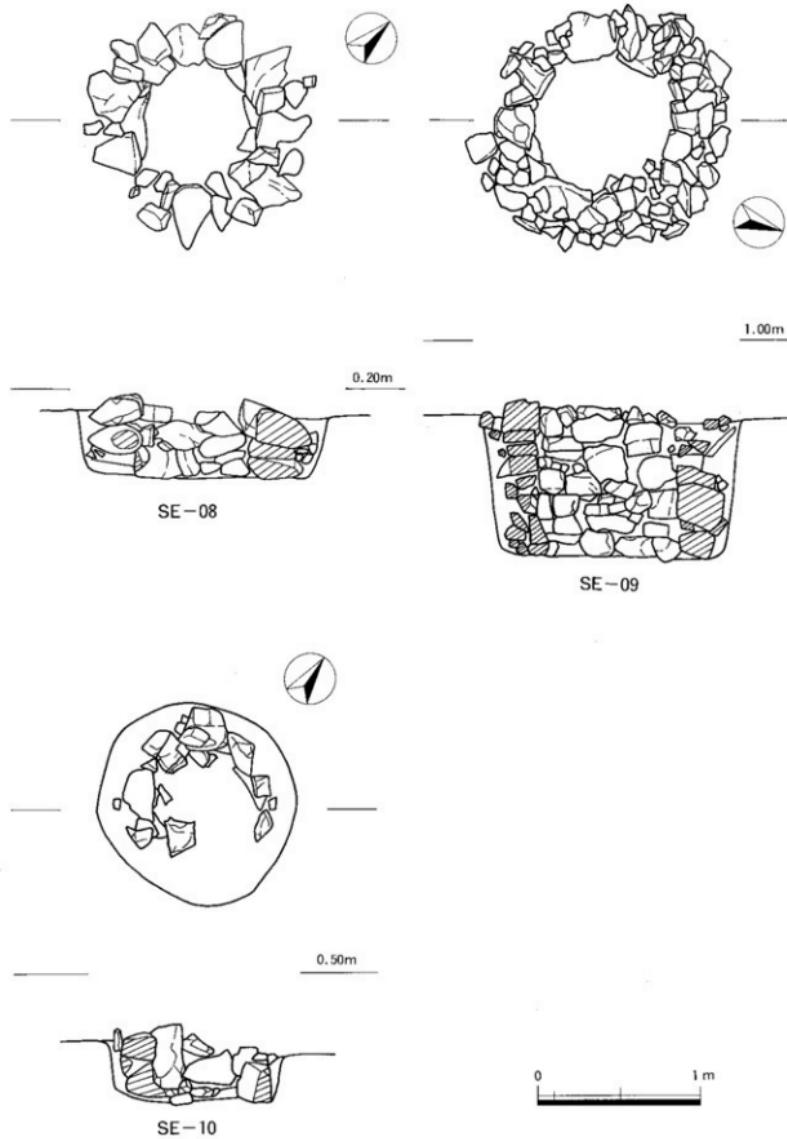
1.00m



SE-07



第7図 井戸実測図



第8図 井戸実測図

S D - 0 2

S D - 02は長さ31.2mにわたって検出し、幅0.8~2.0m、深さ0.3mをはかる。主軸はN-32°-Eである。S D - 02からは幕末～明治の陶磁器が多く出土しているが、胎土目、砂目の唐津皿、絵唐津、17～18世紀代の肥前系磁器等の古い遺物もわずかであるが出土している。時期は17世紀前半～明治である。

S D - 0 3

S D - 03は長さ20.3mにわたって検出し、幅3.7~4.7m、深さ0.7mをはかる。主軸はN-29°-Eである。S D - 03からは17世紀前半～中頃の唐津、幕末～明治の陶磁器が多く出土している。時期は17世紀前半～明治である。

S D - 0 8

S D - 08は長さ14.5mにわたって検出し、幅0.4~0.7m、深さ0.3mをはかる。主軸はN-35°-Eである。S D - 08からは肥前系磁器碗、陶器皿などが出土した。時期は17世紀後半～18世紀である。

S D - 1 2 (第9図)

S D - 12は長さ12.3mにわたって検出し、幅0.3~0.6m、深さ0.3mをはかる。主軸はN-25°-Eである。S D - 12内には5~50cm大の石があり、絵唐津皿、胎土目の唐津皿等が出土した。時期は17世紀前半である。

S D - 1 3

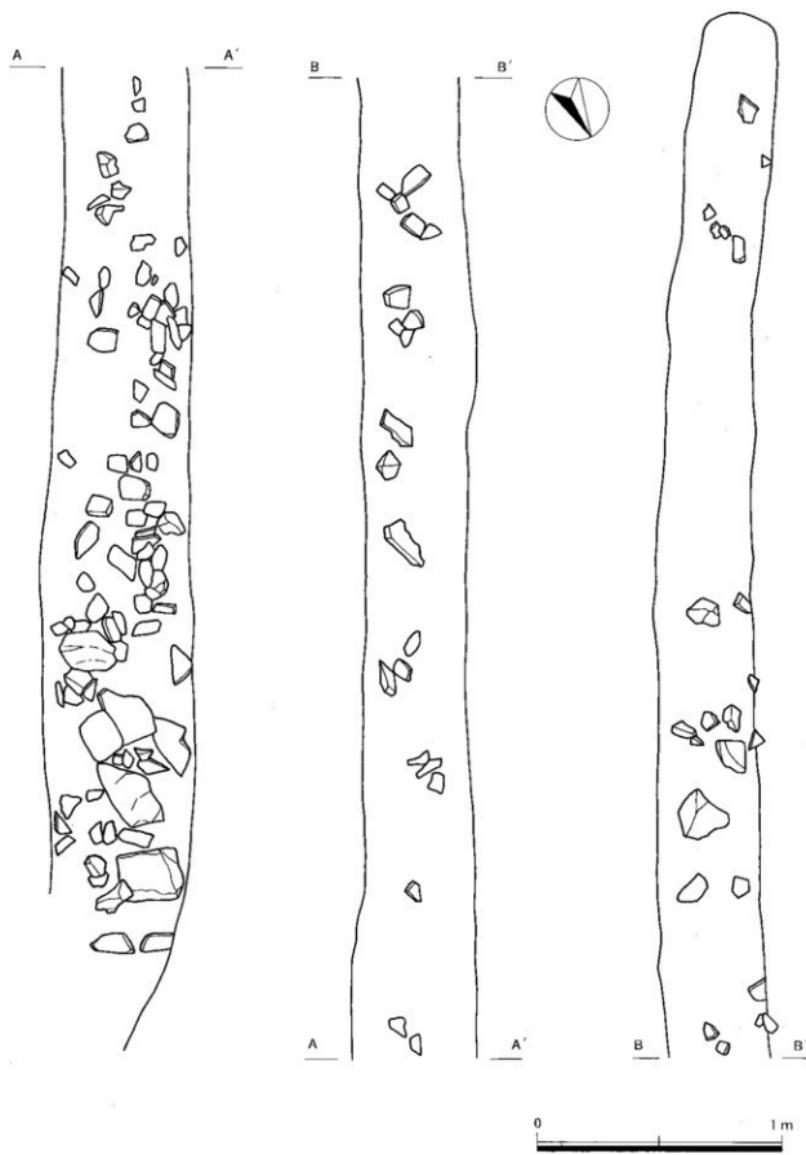
S D - 13は長さ4.6mにわたって検出し、幅0.8~1.2m、深さ0.3mをはかる。主軸はN-23°-Eである。S D - 13からは遺物は出土しなかったが、S D - 13はS D - 12のほぼ延長上にあり、主軸もほぼ同じであることからS D - 12に伴うものと思われ、時期もS D - 12と同じ時期が考えられる。

柵 列

柵列は6条検出した。これらは柱穴内からの出土遺物がないために時期は不明であるが、S A - 01とS A - 04は主軸がほぼ同じで、S A - 03とも主軸がほぼ90°ずれていることから、これらは同時期のものである可能性がある。S A - 05はS D - 08と主軸がほぼ同じであることから、S D - 08に伴う可能性があり、さらに、S A - 04に切られていることからS A - 04よりは古いものと考えられる。S A - 02はS D - 03と主軸がほぼ90°ずれていることから、S D - 03に伴う可能性があり、S A - 06もS D - 03に伴うものと思われる。

S A - 0 1

S A - 01は3間分を検出した。柱間隔は1.1~1.2mをはかり、主軸はN-48°-Wである。柱穴は平面形態が橢円形を呈し、柱穴径は長径0.6~0.7m、短径0.3~0.4m、深さ0.1~0.4mをはかる。



第9図 SD-12実測図

S A - 0 2

S A - 02は4間分を検出した。北西側の2番目の柱は壠方を検出できなかつたが、柱痕跡を確認できた。柱間隔は1.7~1.8mをはかり、主軸はN-60°-Wである。柱穴径0.4~0.6m、深さ0.1~0.3mをはかる。

S A - 0 3

S A - 03は4間分を検出した。柱間隔は1.3~1.4mをはかり、主軸はN-39°-Eである。柱穴径0.3~0.5m、深さ0.2~0.3mをはかる。

S A - 0 4

S A - 04は4間分を検出したが、北西側の2番目の柱穴は検出できなかつた。柱間隔は0.9~1.0mをはかり、主軸はN-50°-Wである。柱穴径0.3~0.4m、深さ0.2mをはかる。

S A - 0 5

S A - 05は6間分を検出したが、北東側の2、3番目の柱穴は検出できなかつた。柱間隔は0.6~0.7mをはかり、主軸はN-36°-Eである。柱穴径は0.3m、深さ0.1~0.3mをはかる。S A - 05は柱の径が小さく、柱間隔も短いことから垣根状のものと思われる。

S A - 0 6

S A - 06はS D - 03の南東肩に位置し、24間分を検出した。S A - 06は杭を打ち込んだもので、杭間隔は0.5~0.9mをはかり、主軸はN-33°-Eである。S A - 06はS D - 03に伴うものと思われ、杭間隔が短いことから垣根状のものと思われる。

5 出土遺物

1 磁 器 (第10、11図)

磁器はS D - 03、第2層から多く出土しており、第3、4層及びS D - 03以外の遺構内からはあまり出土していない。ここでは出土量が多いS D - 03、第2層出土の磁器について報告したい。層序的な新旧関係は古い順にS D - 03→第2層であるが、出土遺物で見る限りではほぼ同時期である。

A S D - 03出土磁器 (第10図)

S D - 03からは17世紀前半～明治の磁器が出土しているが、17世紀と19世紀のものが多く、その間の時期のものはあまり見られない。8、13は17世紀中頃、1～3、5は17世紀後半～18世紀前半、4、7、9、10は18世紀前半、12は18世紀後半、6、11、14～18は19世紀のものである。

碗 (1～6)

1～3は胸胎染付で、口縁は直立気味に立ち上がる。底部は無釉で、高台は三日月状を呈する。1、2は一重網目文を2段に描き、1はその上下に圈線を巡らせないが、2はその上下に

圈線を巡らせる。1は2個体、2は7個体出土している。3は上段には波線、その下には笹（？）を描く。3は5個体出土しており、1～3は数個体そろえたものと思われる。4は口縁が外にやや開き、外面には一重網目文を3段に描き、その上下に圈線を巡らせる。5は波佐見のキハラ唐津で、器壁は厚く、腰が張り、胴部は直立気味に立ち上がる。高台畳付部には砂が付着し、内外面の釉薬には貫入が見られる。6は島根県東出雲町の意東焼の広東碗で、見込みには「寿」字がある。

鉢（7）

7は上手物の鉢で、口縁端部は外反し、見込みには唐草を描く。高台内には「大明成化年製」の銘があり、高台畳付部には砂が付着する。内面から見込みにかけての釉薬には貫入が見られる。

皿（8～10）

8は高台が低く、幅が広い。外面には釉薬が厚くかかる。9は器壁が厚く、見込み蛇ノ目釉剥ぎである。内面には格子目文を描く。10は口縁が大きく内湾し、見込み蛇ノ目釉剥ぎである。

湯飲み碗（11）

11は筒型の湯飲み碗で、外面には墨書きによって縁どりし、さらに、濃淡2つの濃みによつて蓮弁を表現している。口縁端部には口紅装飾を行っている。

紅皿（12）

12は口縁が内湾し、外面には笹（？）を描く。

小坏（13～15）

小坏はいずれも口縁端部が外反する。13は高台無釉で、外面には蘭を描く。14、15は大型の小坏で、14の底部は欠損しているが高台内には「…年製」の銘がある。

そば猪口（16）

16は意東焼で、底部は直立気味に立上がり、広東碗風を呈する。底部と胴部の境から口縁にかけては外傾し、外面には線描きによって龍、雲を描く。

油壺（17）

17は最大径を胴部下位にもち、外面には草花と獅子を描く。

仏飯器（18）

18は底部無釉で、底部には墨書きによる「×」印がある。内外面の釉薬には貫入が見られる。

B 第2層出土磁器（第11図）

第2層からは17世紀前半～明治の磁器が出土しているが、17世紀と19世紀のものが多く、その間の時期のものはあまり見られない。24、26は17世紀中頃、20、21、25、27は17世紀後半～18世紀前半、19、22、23、28～33は19世紀のものである。

碗（19～21）

19は器壁が薄く、口縁は外傾気味に開く。見込みには線描きによる花を描き、底部は欠損しているが高台内には「大明年製」の銘があったものと思われる。20は器壁が厚く、口縁は内湾

する。口径に比べて器高が低く、内外面の釉薬には貫入が見られる。21は陶胎染付で、高台内まで施釉されている。外面には一重網目文を描き、その下には圈線を巡らせていている。

湯飲み碗（22、23）

22、23は腰が張り、口縁まで直立気味に立上がる。22は器壁が厚目で、外面には幹と葉を濃みで、枝を線描きで表現した竹を描き、枝には鳥（？）がとまっている。22は2個体出土している。23は高台が低く、外面には線描きによる鳥を描く。底部は欠損しているが見込みには線描きによって何かが描かれている。

皿（24～27）

24は口径が小さく、口縁端部は外反する。見込みには半菊と蘭（？）を組み合わせたものを描く。高台は蛇ノ目高台で、高台疊付部には砂が付着する。内外面の釉薬には貫入が見られる。25は見込み蛇ノ目釉剝ぎで、釉剝ぎ部分には砂が付着する。高台は三日月状を呈し、底部無釉である。26は見込みには草花と思われるものを描き、見込みから口縁にかけては花卉を陽刻する。高台は低く、高台疊付部には砂が付着する。27は高台径が大きく、見込みには松竹梅を環状に配し、その外側にはうすい濃みの中に線描きによって文様を描き、文様帯をつくっている。さらに、その外側には蜻唐草を描く。高台内には「富貴長春」の銘がある。

小壺（28）

28は白磁で、口縁端部は外反する。

そば猪口（29）

29は蛇ノ目凹形高台で、外面には草、樹木等の風景、内面には四方擗文を描く。線は太く、濃みには濃い青を用いる。

蓋（30）

30は意東焼で、内面には筆を描き、外面、つまみの内側にも文様を描く。線は太めで、濃みを多用している感じである。

瓶（31）

31は色絵の瓶で、器壁は薄い。頸は細く、口縁端部は外反する。外面は剥げ落ちているが、頸部には3条の線、胴部には花を描く。色絵具には主に赤を用い、緑も見られる。

仏飯器（32、33）

33は底部中心を底上げし、蛇ノ目高台風につくる。高台内にも釉薬がかかる。

2 陶 器（第12、13図）

陶器はSD-03、第2層から多く出土しており、第3、4層及びSD-03以外の遺構内からはあまり出土していない。ここでは出土量が多いSD-03、第2層出土の陶器について報告したい。様相的には17世紀前半～中頃の唐津、19世紀の在地系ものが多く、その間の時期のものはあまり見られない。また、従来の糞子城跡出土の唐津皿には見込みに砂目をもつものの比率が高いが、今回の調査では胎土目をもつものの比率が高い。

A SD-03出土陶器（第12図）

SD-03からは17世紀前半～明治の陶器が出土しているが、17世紀前半～中頃の唐津と19世紀の在地系ものが多く、その間の時期のものはあまり見られない。34～37は17世紀前半、38～43は17世紀前半～中頃、44～46は17世紀中頃、47～54は19世紀である。

唐 津（34～43）

皿（34～40）

34～37は見込みに胎土目をもつもので、いずれも底部と胴部の境に段をもち、外反気味に立ち上がった後、口縁端部はやや内湾する。34～36の底部には高台を削りだす際のケズリ痕が見られるが、37は回転ナデ調整によってこれをナデ消している。34は高台が三日月状を呈し、高台疊付部には糸切り痕が見られる。35、36は底部の器壁が薄く、高台疊付部の幅は狭い。37は高台疊付部の幅が広く、高台は三日月状を呈する。内面には鉄絵を施す。38～40は見込みに砂目をもつもので、38、39は底部まで回転ナデ調整を行っている。38は口径が小さく、底部と胴部の境に段をもち、外反気味に立ち上がった後、口縁端部はやや内湾する。高台はあまり削り込まれておらず、底部と高台との区別が不明瞭である。高台は三日月状を呈し、高台疊付部には砂目痕がある。39は胴部が内湾気味に立上がり、口縁端部は外反する。見込みには3つの砂目があり、焼成の際、上に重ねた皿の高台が熔着している。高台は三日月状を呈し、高台疊付部には砂目痕がある。40は総釉薬で、見込みには6つの砂目がある。高台は高く、高台疊付部には砂目痕がある。

碗（41、42）

41は総釉薬で、高台疊付部の幅が広く、高台は三日月状を呈する。42は高台が三日月状を呈し、高台疊付部には糸切り痕が見られる。内外面とも鉄釉がかかる。

鉢（43）

43は胴部中央付近で大きく内湾した後、口縁が大きく外反し、口縁端部は肥厚する。口縁は内外面とも二彩手となっているが、それ以外は無釉である。

九 州 系（44～46）

44～46は碗である。いずれも内湾気味に立上がり、口縁端部はやや外反する。45は火を受けている。46は高台が三日月状を呈し、高台疊付部には糸切り痕が見られる。

在 地 系（47～54）

碗（47～49）

47～49は小型の碗で、47、48は口縁端部が外反する。47は布志名である。高台径は大きく、高台は面取りを行っている。高台内無釉である。48は高台径が小さく、底部無釉である。49は直立気味に立上がり、高台内施釉である。

皿（50）

50は布志名である。口縁は内湾し、口縁の3か所を内側にへこましている。見込みには梅、桜、瓢箪のスタンプが押されている。外面下半部は無釉で、底部は回転ナデ調整を施す。

灯明皿 (51)

51は外傾する皿の中にやや内傾する仕切りがあり、仕切りには切り込みがある。内面には釉がかかるが、外面は縁以外は無釉である。底部は回転ナデ調整を施す。

蓋 (52、53)

52は蓋の縁が水平にのび、上面には鉄釉がかかるが、下面是無釉である。下面には回転糸切り痕が見られる。53は蓋の縁が逆L字状に屈曲する。上面には釉がかかるが、下面是無釉である。下面には回転糸切り痕が見られる。

甕 (54)

54は小型の甕で、胴部は大きく内湾して立上がり、口縁端部は外反し、肥厚する。

B 第2層出土陶器 (第13図)

第2層からは17世紀前半～明治の陶器が出土しているが、17世紀前半～中頃の唐津と19世紀の在地系ものが多く、その間の時期のものはあまり見られない。55～60、63～71は17世紀前半、61、62は17世紀前半～中頃、72～74、77は17世紀中頃、76、78～80は19世紀である。

唐津 (55～71)

皿 (55～63)

55～60は見込みに胎土目をもつもので、55は口縁が内湾する。56～58は内湾して立上がり、口縁端部がわずかに外反する。56、57は見込みに4つの胎土目がある。56は菖箆底風で高台は三日月状を呈する。57は高台疊付部の幅が狭く、高台は三日月状を呈する。58は高台疊付部の幅が広く、高台は三日月状を呈する。59は口縁端部が外反するもので、高台の削り込みが浅いため高台は低く、高台疊付部の幅は広い。見込みには3つの胎土目がある。60は底部と胴部の境に段をもち、外反気味に立ち上がった後、口縁端部はやや内湾する。高台疊付部には胎土目痕があり、糸切り痕も見られる。高台は三日月状を呈する。61、62は見込みに砂目をもつものである。61は溝縁皿で、見込みには3つの砂目があり、砂目はかなりの厚みをもっている。高台疊付部には砂目痕があり、糸切り痕も見られる。62は口径が大きいものである。高台は高く、高台疊付部の幅は広い。内外面、高台内ともに灰釉がかかるが、外面下半部はかいらぎ状になっている。また、内面には焼成時の灰がかかる。63は口縁が内湾し、見込み蛇ノ目釉剣ぎである。内面には鉄絵が施されている。

碗 (64～69)

64は高台が内傾し、三日月状を呈する。外面と口縁の内面には灰釉、内面の口縁以下には鉄釉がかかる。65はやや腰が張り、直立気味に立ち上がる。高台は外傾する。66は外面に鉄絵を施し、内面には焼成時の灰がかかる。高台疊付部には糸切り痕が見られる。67は底部から胴部にかけて外傾した後に内側に折れ曲がる。高台は三日月状を呈し、竹の節高台である。68、69は高台の付け根部分を削り込み、高台疊付部には糸切り痕が見られる。68は松浦系である。

向付 (70)

70は腰部が内湾した後、ほぼ直角に屈曲して口縁につづくものと思われ、内面には鉄絵を施

す。内外面、高台内とも灰釉がかかり、外面はかいらぎ状になっている。高台内には砂が付着する。

鉢 (71)

71は見込みに胎土目があり、高台内には砂が付着している。内面と外面の上半部には灰釉がかかる。

京 焼 系 (72)

72は碗である。内湾気味に立上がり、器壁は薄く、外面には鉄絵を施す。

在 地 系 (73~80)

碗 (73~76)

73、74は直立気味に立上がり、高台内にも施釉されている。73は高台径が小さく、高台は三日月状を呈する。74は火を受け、高台は三日月状を呈する。75は高台内にも施釉されており、内外面には刷毛目装飾を施す。76は口縁端部がやや外反する。底部無釉で、高台は三日月状を呈する。

皿 (77)

77は口縁端部が大きく外反し、見込み蛇ノ目釉剥ぎである。内外面とも口縁と底部に吳須で圈線を描く。

鉢 (78~80)

78は布志名で、口縁を内側に折り曲げている。外面には緑色の釉がかかり、内面は無釉である。79は胴部が大きく内湾した後、口縁は外反し肥厚する。80は口縁が大きく外反し、口縁端部を内側に折り曲げる。高台は高く、面取りを行っている。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施され、見込み中央は渦巻状に釉をぬぐっている。また、見込み中央には重ね焼きの窯に生じた直径7cmの環状の砂が付着している。

3 插 鉢 (第14図)

擂鉢には備前、唐津系、産地不明のものがある。産地不明のものは口縁の形態によって2つに分類できる。

備前 (81、82)

口縁が幅広い帯状になって張り出し、口縁外面には81、82とも2条の凹線が巡る。81の内面には9本1単位の粗い擂目があり、82の内面には12本1単位の擂目がある。

唐津系 (83、84)

83は口縁端部が内側水平方向に突出し、上部にわずかな凹線がつく。口縁内外面には鉄釉がかかり、内面には7本1単位の擂目がある。84は口縁が内側に肥厚し、細い突帯をつくり出す。口縁内外面には鉄釉がかかる。

産地不明の擂鉢 (85~88)

A類 (85、86)

口縁端部を外側に折り曲げ、口縁外面直下を外下方へつまみ出したものである。85は口縁が

やや内湾する。86は口縁が外傾し、内面には11本1単位の擂目がある。

B類 (87、88)

口縁端部を外側に折り曲げて肥厚させ、さらに、口縁外面がヨコナデによってほぼ平坦になつたもので、87は口縁端部のみに釉がかかる。内面には14~16本1単位の擂目がある。88の内面には11本1単位の擂目がある。

4 かわらけ・灯明皿 (第15図)

かわらけ・灯明皿は成形、調整技法、口縁の形態によって5つに分類できる。

A類 (89~91)

手づくね成形後、底部をナデ調整、口縁内外面をヨコナデ調整するもので、口縁外面のヨコナデ調整は粗く、手づくね成形時の指頭圧痕が残る。口縁は内湾気味に立ち上がる。89の底部には墨書がある。

B類 (92~95)

手づくね成形後、底部をナデ調整、口縁内外面をヨコナデ調整するもので、口縁外面には手づくね成形時の指頭圧痕がわずかに残るが、A類よりも丁寧にヨコナデ調整を行っている。口縁は外反する。

C類 (96~98)

手づくね成形後、底部をナデ調整、口縁内外面をヨコナデ調整するもので、A、B類よりも丁寧にヨコナデ調整を行っている。口縁は外反し、口縁と底部の境には稜がつく。

D類 (99~104)

底部を回転糸切りによって切り離すもので、ロクロ成形のものが多い。口縁の形態によって細分が可能であろう。

E類 (105、106)

底部を静止糸切りによって切り離すもので、底部をナデ調整、口縁内外面をヨコナデ調整する。口縁は外傾し、器高は高く、器壁は厚手である。

5 焰 烙 (第16図)

焰烙は調整技法によって5つに分類できる。

A類 (107、108)

口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕がないもので、口縁端部はあまり明瞭ではないが外傾する面をもつ。底部外面には右上がりの叩き痕がある。また、口縁と底部の境に強目的ヨコナデ調整を行っている。口縁がやや内傾するもの(107)と口縁が内湾するもの(108)とがある。

B類 (109)

口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕がないもので、口縁は内傾し、口縁端部は外傾する面をもつ。器壁は薄い。

C類 (110)

口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕が残り、これをヘラケズリによって仕上げたもので、口縁は直立気味に立上がり、口縁端部は丸くおさまる。外面を櫛状工具で左上上がりに搔き上げた後にヨコナデ調整を行うが、特に口縁端部は丁寧にヨコナデ調整を行っている。

D類 (111、113～115)

口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕が残り、これをヘラケズリによって仕上げたもので、口縁は内湾気味に立上がり、口縁端部は丸く肥厚する。器壁はやや厚手である。これらはすべて粘土を貼り付けて上から下へと1孔を穿った把手を口縁外面上端の相対する2か所に有するが、孔の径が小さく、孔が下まで貫通せずに途中で止まるもの(111)と孔の径が大きく、孔が上から下へ貫通するもの(113～115)がある。

E類 (112)

口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕が残るが、ヘラケズリによる仕上げを省略したもので、口縁は内湾気味である。器壁はやや厚手である。

6 瓦質土器 (第16図)

116、117は羽釜で、口縁は短く、やや内傾する。胴部中央には鰐を巡らし、肩部には孔を穿った1対の把手を有する。116は厚手で、口縁端部は平坦で面をなす。117は内外面にハケ調整を施し、口縁端部はハケ調整後、ヨコナデ調整を施す。胴部外面もハケ調整後、ナデ調整を行っている。118、119は鉢で、口縁と胴部の境に段がつき、口縁は大きく外反し、口縁端部は肥厚する。胴部内面はヨコ方向のハケ調整を施し、119の胴部外面には獅子頭の把手がつく。

7 瓦 (第17図)

軒丸瓦 (1～3)

軒丸瓦は左巻きの三ツ巴文と珠文を組み合わせたもので、1は2、3よりも珠文が小さく、瓦当直径14.4cmで、珠文の数は推定19個である。2は瓦当直径14.6cmで、珠文の数は推定16個である。3は瓦当直径14.6cmで、珠文の数は推定15個である。

軒平瓦 (4～6)

軒平瓦は瓦当文様によって3つに分類できる。

A類 (4)

中心飾りは三葉の桐で、その外側には2反転の唐草を配する。

B類 (5)

中心飾りは花弁または萼と二葉を組み合わせたもので、その外側には3反転の唐草を配する。

C類 (6)

中心飾りは十字と雨垂れ状のものを組み合わせたもので、その外側には4反転する唐草を配する。

軒棧瓦（7、8）

7、8は軒棧瓦の軒丸部で、7は左巻きの三ツ巴文と珠文を組み合わせたもので、瓦当直径8.6cmで、珠文の数は12個である。8は左巻きの三ツ巴文と8反転する唐草を組み合わせたもので、瓦当直径9.0cmをはかる。

8 木製品（第18図）

1は杵状木製品で、中央部を両端より細く削りこんで握りをしている。2は切匙で、柄尻に孔を穿つ。3はものさしで、大目盛間は3.7～4.2cmと等間隔ではなく、大目盛間の中目盛も孔を穿った側の2つは大目盛間の中央よりもずれて刻んである。その他の中目盛は大目盛間のはば中央にある。4は柄杓の柄で、断面長方形を呈し、先にいくほど細くなっている。5は樽または桶の蓋板または底板で、復元径は25.6cmである。

9 漆 器（第18図）

6は蓋、7は椀である。6、7とも外面は黒色塗、内面は赤色塗で、外面に文様を描く。

10 土 錘（第19図）

土錘は120点出土しており、すべて中心に孔を穿つ管状土錘である。土錘は長さ、最大径、重さによって11に分類できる。

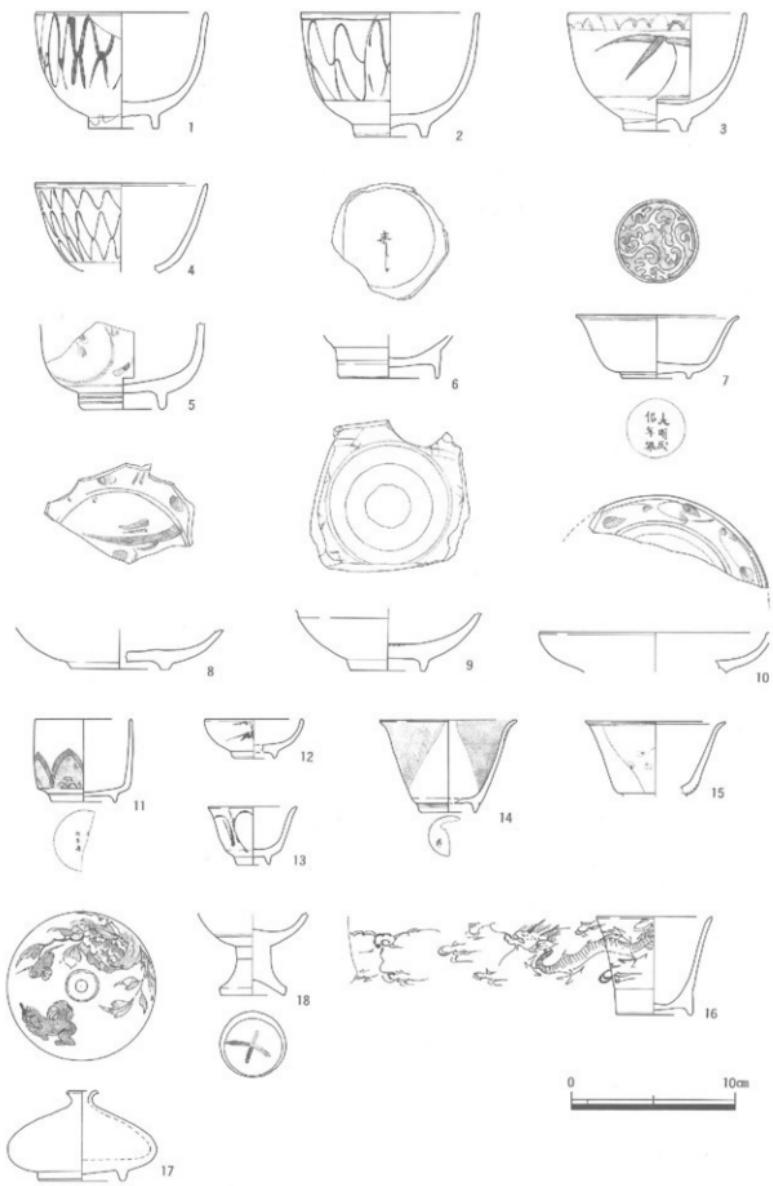
- A類（1、2） 長さ6.9～7.1cm、最大径4.4～4.5cm、重さ100g前後のもの。
- B類（3、4） 長さ5.9～6.2cm、最大径3.4～3.5cm、重さ75g前後のもの。
- C類（5、6） 長さ6.1～6.2cm、最大径2.7～2.9cm、重さ50g前後のもの。
- D類（7、8） 長さ4.1～4.7cm、最大径2.1～2.5cm、重さ20g前後のもの。
- E類（9、10） 長さ4.6～4.9cm、最大径2.1cm、重さ20g前後のもの。
- F類（11、12） 長さ4.4～4.9cm、最大径2.9～3.3cm、重さ40g前後のもの。
- G類（13、14） 長さ5.1～5.3cm、最大径1.1～1.2cm、重さ10g前後のもの。
- H類（15、16） 長さ4.6～4.7cm、最大径1.0～1.1cm、重さ5g前後のもの。
- I類（17、18） 長さ3.7cm、最大径1.3～1.4cm、重さ5g前後のもの。
- J類（19、20） 長さ2.9～4.0cm、最大径1.7～1.9cm、重さ2.5g前後のもの。
- K類（21、22） 長さ1.8～2.2cm、最大径1.2～1.6cm、重さ3g前後のもの。

11 石製品（第19図）

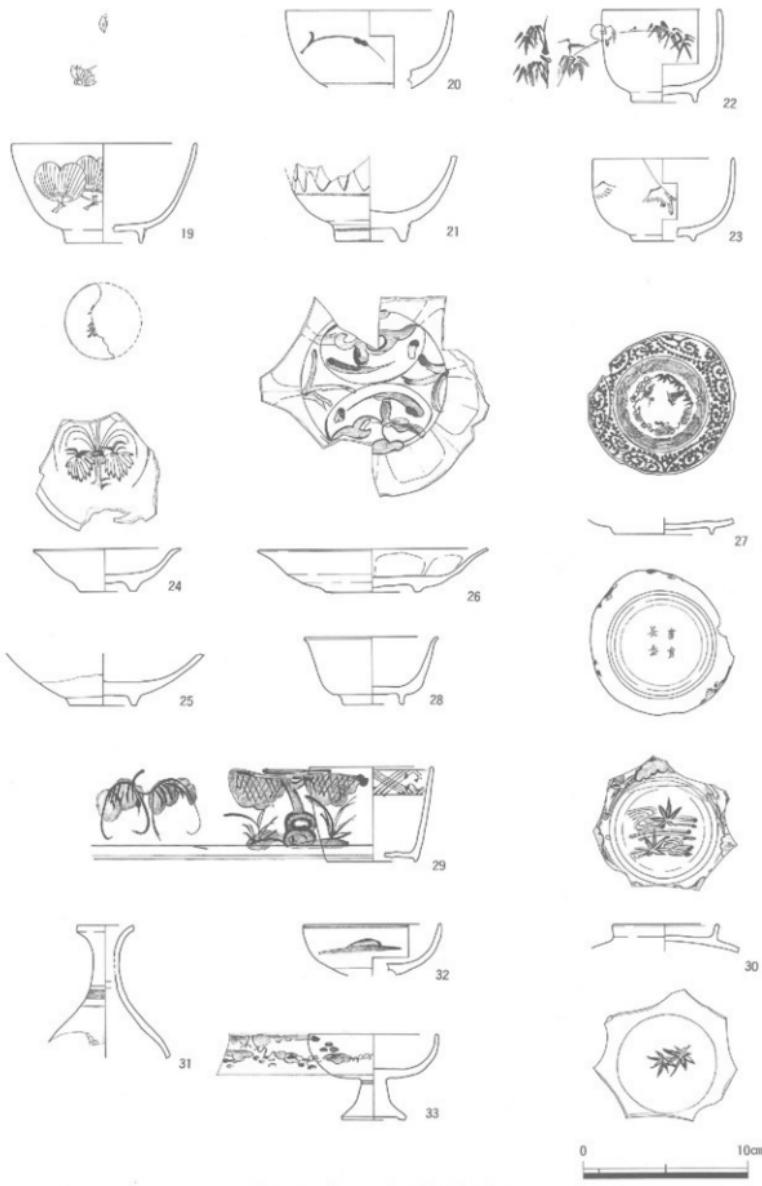
23は下部を欠損するが、六角錘を呈し、先端をさらに削っている。水晶製で、用途は不明である。24は黒の碁石で、直径2.1cm、厚さ0.5cm、重さ3gをはかる。25は砥石で、約半分を欠損するが、長方形を呈し、四隅を面取りする。表面には縦方向に幅4mmの線状のくぼみがみられる。

12 金属製品（第19図）

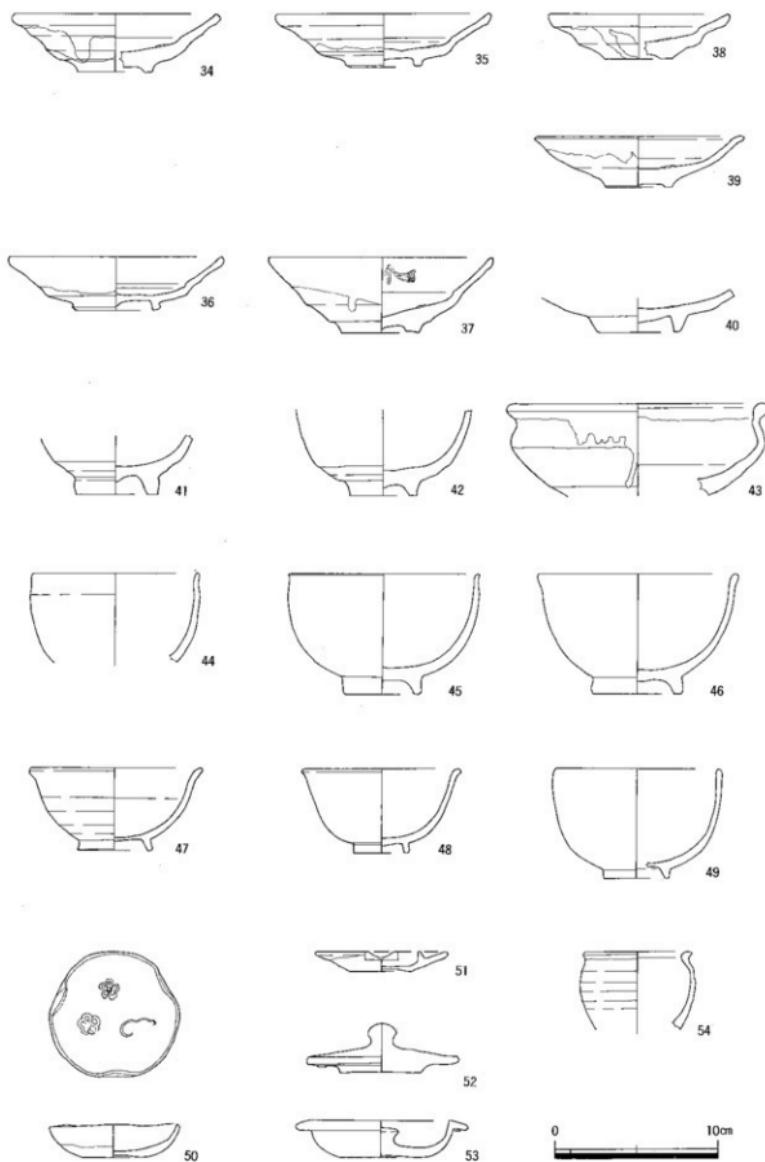
26～28は煙管である。26は雁首で、ラウ結合部から見て右側に銅板の継ぎ目がある。27、28は吸口で、27は太くて短く、28は細長い。29は分銅で、直方体の上部に孔を穿ったつまみを有する。重さは50 g をはかる。30は雁またの巻で、二股に開いた内側に刃がつく。茎は長さ10.7 cmをはかり、その断面は正方形で先端を尖らせてている。



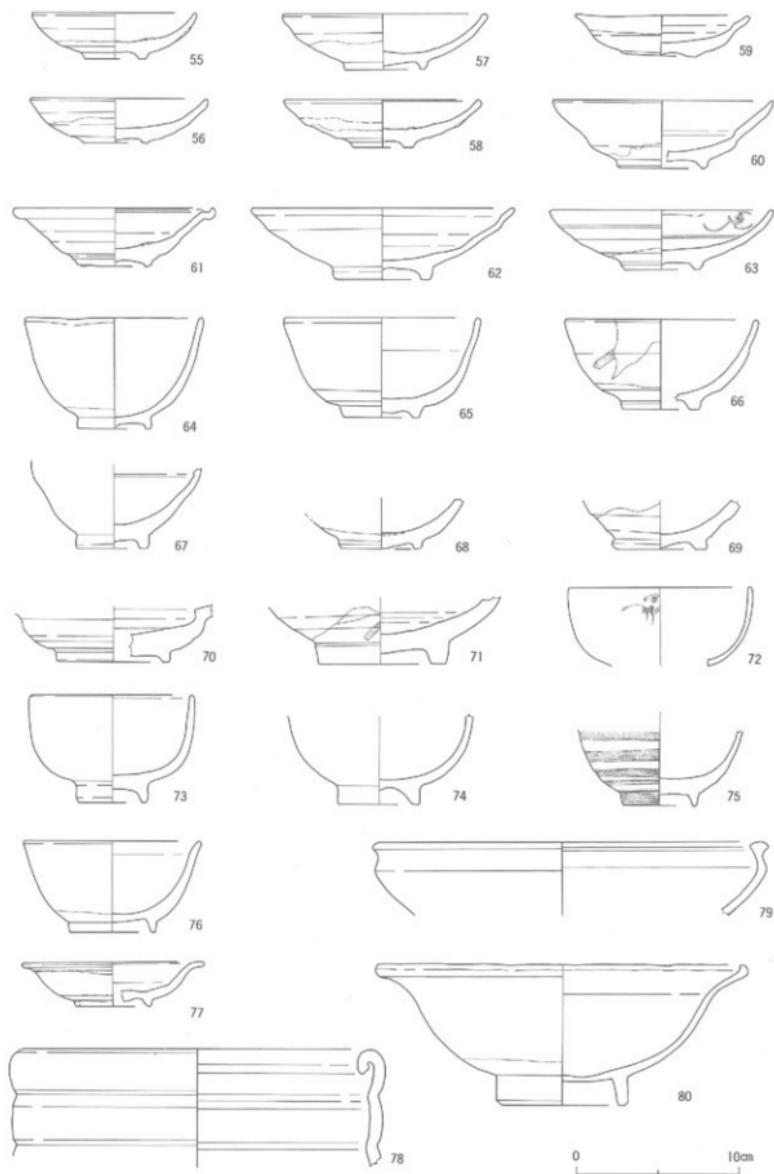
第10図 SD-03出土磁器実測図



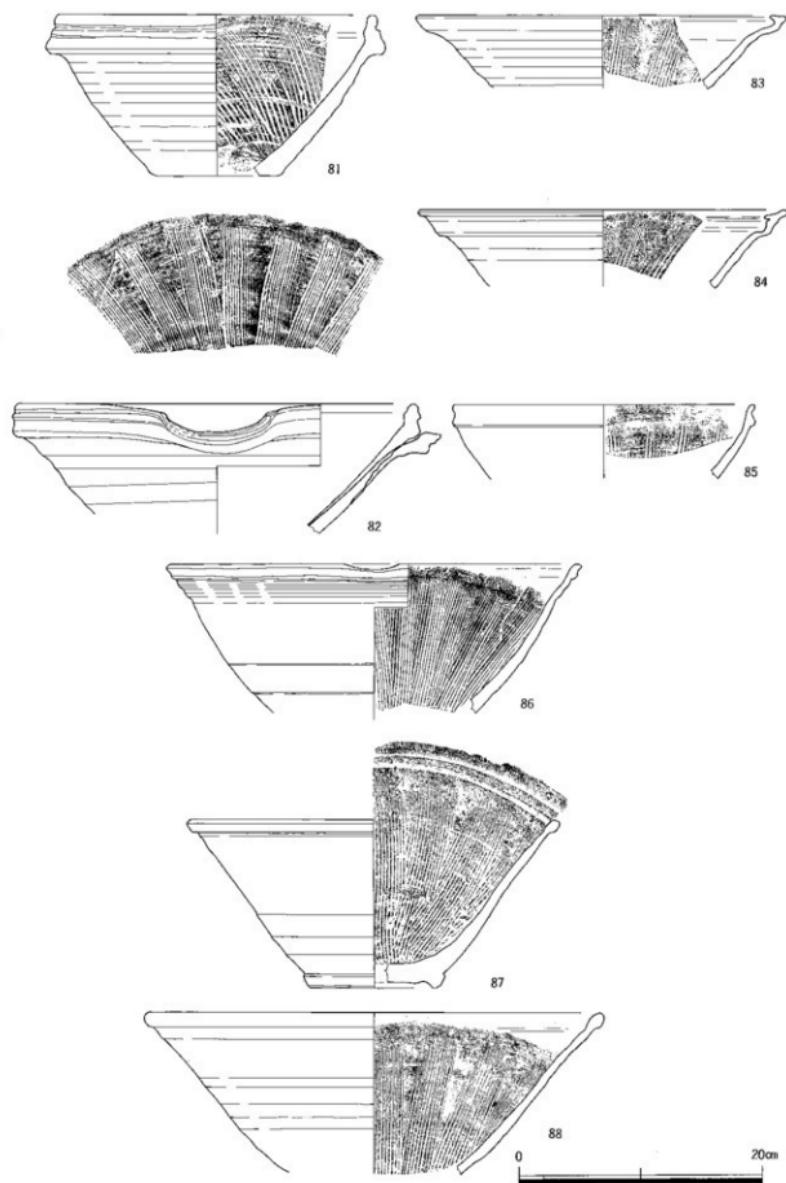
第11図 第2層出土磁器実測図



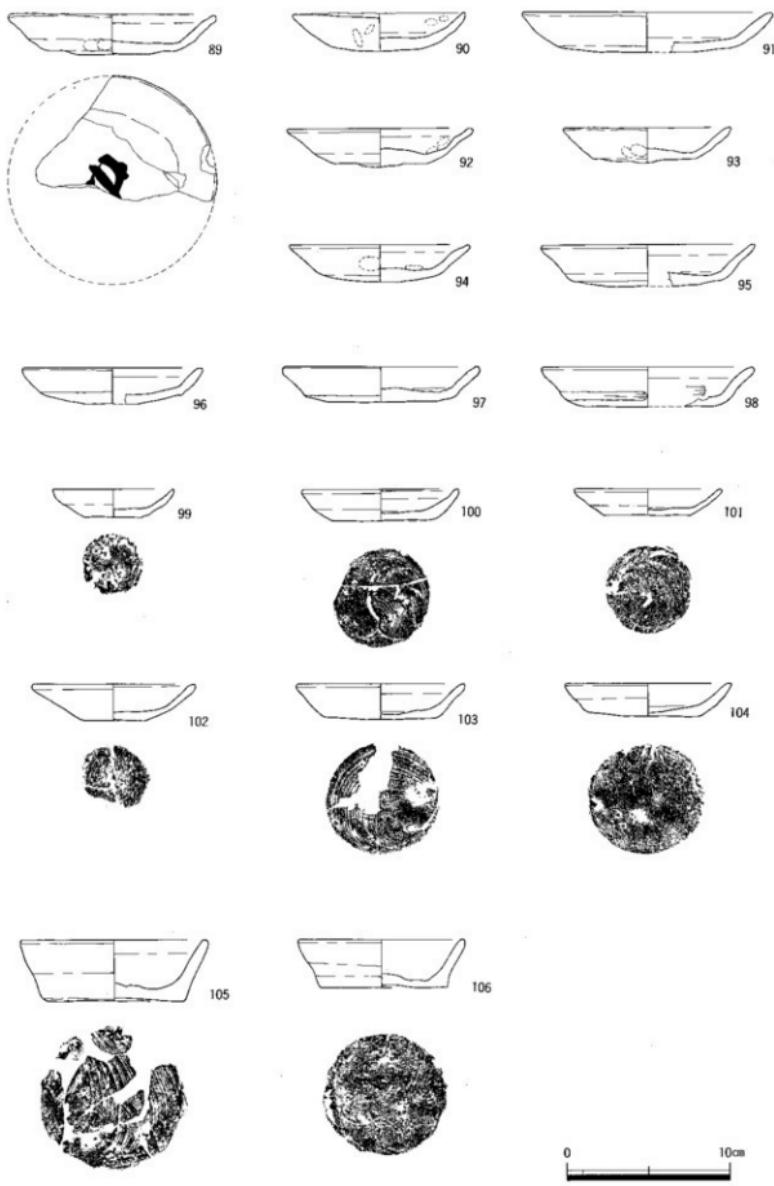
第12図 SD-03 出土陶器実測図



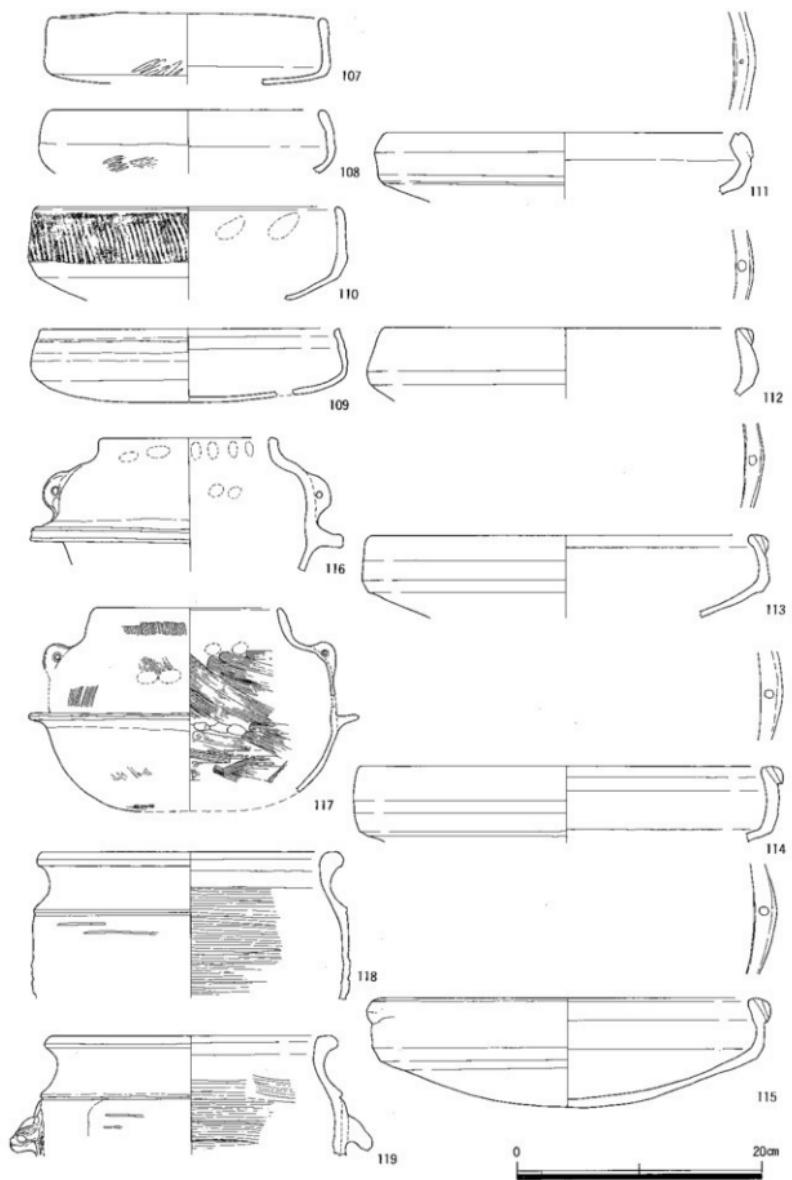
第13図 第2層出土陶器実測図



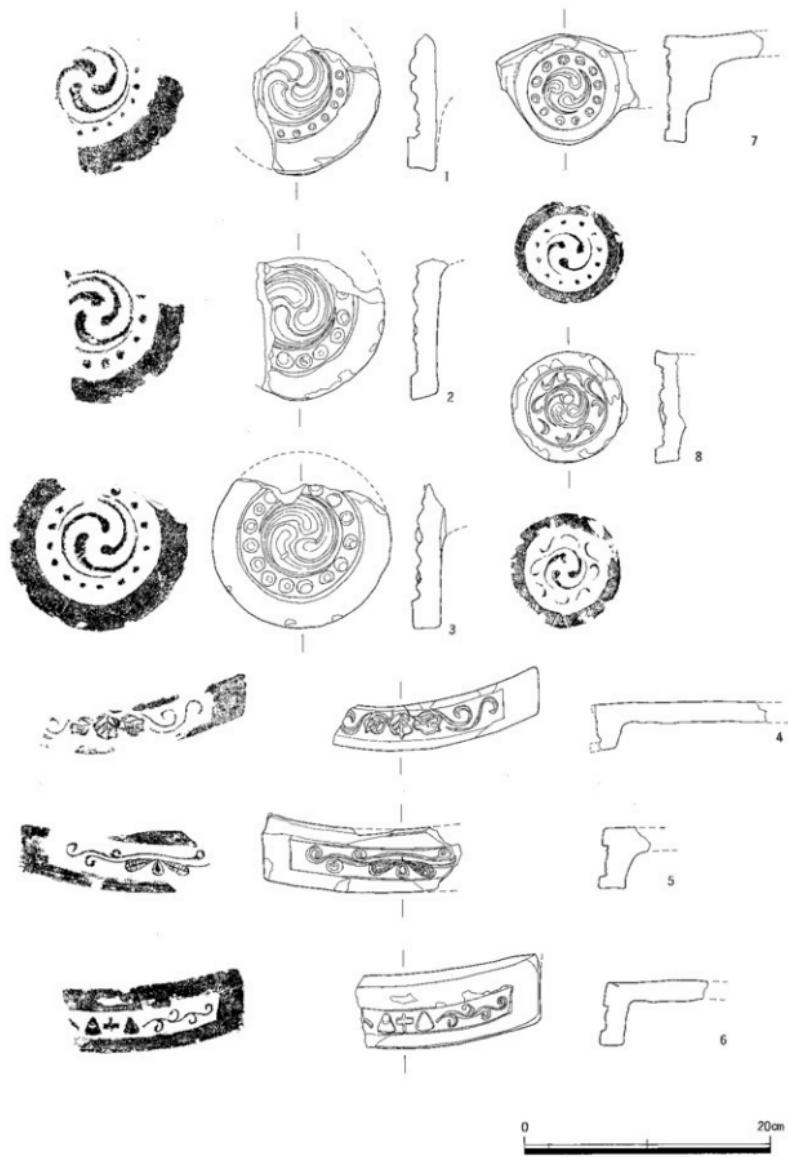
第14図 擂鉢実測図



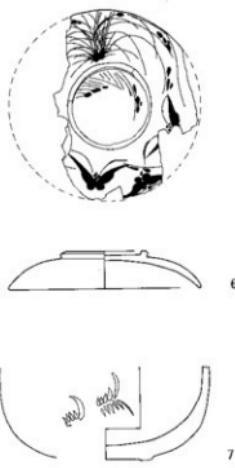
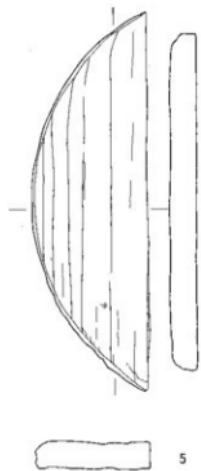
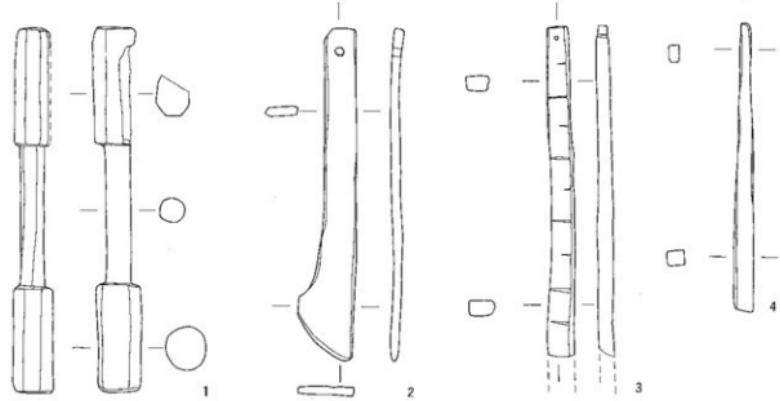
第15図 かわらけ・灯明皿実測図



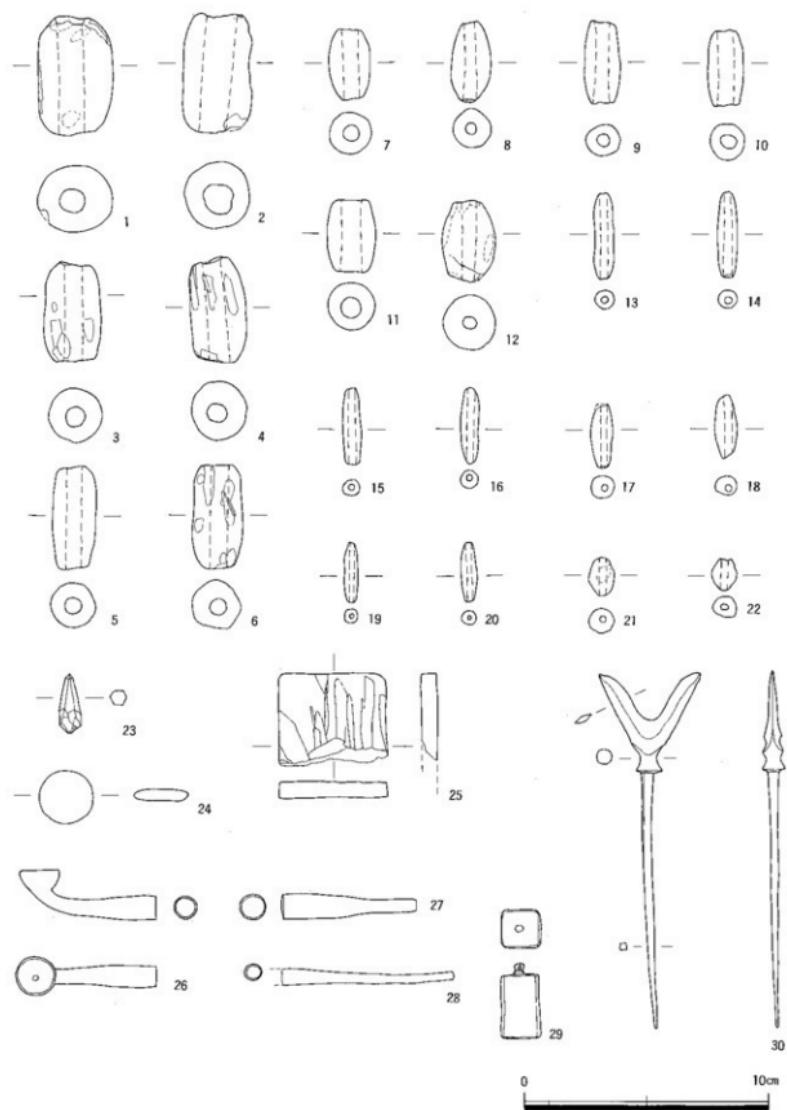
第16図 焙烙・瓦質土器実測図



第17図 瓦実測図



第18図 木製品・漆器実測図



第19図 土錘・石製品・金属製品実測図

6 まとめ

1 旧地形と古環境

今回の調査では南西から北東へ傾斜する岩礁性の岩盤を検出した。この岩盤は調査地の南西の加茂神社境内の社殿の下に現地表面より露出しており、これを頂点に北東へ傾斜するものと思われる。しかし、加茂神社の南西側は米子城跡7遺跡の調査の際に現地表面より約3m掘削したが、砂とシルトの互層で、岩礁性の岩盤は確認できず、南西側ではこの岩礁性の岩盤は急速に落ち込んでいるものと思われる。

このような岩礁性の岩盤は久米第1遺跡、米子城跡5遺跡でも確認されており、久米第1遺跡では崖錐性堆積層や傾斜面水底部から縄文時代前期と晚期初頭を中心とする土器が出土し、米子城跡5遺跡でも縄文時代晚期の土器が出土している。また、今回の調査でもこの岩礁性の岩盤直上の水成層から縄文時代晚期の土器が出土しており、調査地周辺は縄文時代には岩礁性の岩盤で構成される汀線が迫っていたものと思われる。その後、弓ヶ浜砂州形成に伴って内湾環境からより淡水の影響を強く受ける湾奥の汽水域となり、さらに、江戸時代初期まで海水、河川による砂の堆積がつづき、陸地化される。

また、今回の調査に伴って行った花粉分析から調査地周辺の縄文時代晚期～古墳時代頃の植生を復元すると、湊山、飯山から米子市南西部に広がる丘陵地、あるいは大山山麓にかけてはアカガシ亜属を要素とする照葉樹林に覆われていたものと推定される。また、大山山麓から中腹にはスギやモミ、ツガなどを要素とする中間温帯林、中腹にはブナ林の存在が考えられる。一方、調査地周辺では加茂川による堆積作用により形成された低湿地で稲作が行われていたものと考えられる。

2 屋敷の境界

今回の調査では屋敷の境界を示すと思われる溝（SD-02、03、08、12、13）を検出した。一般的には屋敷の境界施設として土塀、板塀、垣根などが考えられるが、米子城跡における今までの調査ではこのような境界施設は米子城跡8遺跡で土塀の基礎の根固めと思われる石列を確認したのみである。この石列は調査地の南東側をとおる城下町のいわばメインストリートと屋敷との境界に位置するものと思われ、この1例のみで結論を述べるのは早計であるが、屋敷のうちでも道に面した部分は体裁をととのえるために土塀もしくは板塀を築いていた可能性がある。一方、個々の屋敷の境界にはこのような立派な施設は築かれず、屋敷内の排水を行う目的も兼ねた幅0.5～2mの溝によって屋敷の境界が示されていたものと思われる。しかし、屋敷の境界が溝だけであるとは考えにくく、屋敷への出入りを防ぐための遮蔽施設の存在が考えられる。今までの調査ではそのような施設は確認されてはいないが、溝の両側あるいは片側に垣根状の施設が築かれていた可能性がある。

今までの調査では屋敷の境界を示すのに、主に幅0.5～2mの比較的幅の狭い溝が用いられ

ているが、例外的にSD-03のような大規模な溝が存在する。SD-03は幅3.7~4.7m、深さ0.7mの溝で、このような大規模な溝には米子城跡7遺跡のSD-41、米子城跡8遺跡のSD-04がある。米子城跡7遺跡のSD-41は幅8.6m、米子城跡8遺跡のSD-04は幅2.8~4.8mもあり、ただ単に屋敷の境界を示し、なおかつ屋敷内の排水を行うだけのものであるとは考えにくく、用水路、運河的性格を兼ねそろえていた可能性がある。米子城跡7遺跡のSD-41は内堀につづく水路としての性格が考えられ、また、米子城跡8遺跡のSD-04はその両岸にはしがらみが築かれ、さらに、屋敷に水を引き入れるための堰と溝があり、水路としての性格が考えられる。

今回調査を行ったSD-03もこれらと同様の性格が考えられる。宝永6年、享保5年の絵図には水路が描かれており、詳細は不明であるが、そのうちの1本が山本半助と柘植定右衛門の屋敷の境界付近を流れるものと思われ、その途中で南東方向に直角に折れ曲がっている。SD-03は位置的にも時期的にもこの水路と一致する可能性があるが、調査区中央付近のSD-03がとぎれたところから南東方向へ折れ曲がる溝は確認できず、また、米子城跡3遺跡でもこの延長上にあると思われる溝を確認できなかったため、現時点では絵図の水路とSD-03とが一致するかどうかは断定しかねる。しかし、城下町には内堀と外堀以外に屋敷と屋敷との間をぬってこのような大規模な水路あるいは運河的性格を有すると考えられる溝が存在するものと思われる。

3 城下町の形成と武家屋敷の整備

今回の調査では17世紀前半～中頃の唐津の出土が目立つが、それ以前の陶磁器、土器はほとんど出土しておらず、前時代とのつながりが認められないことから、当地域周辺は江戸時代に入って開発されたものと思われる。このような状況は米子城跡7、8遺跡でも見られ、調査地周辺では17世紀前半～中頃に城下町の形成が行われたものと思われる。このことは寛永9年(1632)には城下町の町割りがほぼ完成していたという文献の記述と一致する。しかし、今までの調査の結果、この城下町の形成は城下町の街路が整備され、中海に近い地域の屋敷が整備されただけのもので、その他の地域は街区は形成されていたであろうが、個々の屋敷地についてはこの時点では整備されていなかったものと思われる。

中海に近い米子城跡1遺跡は近世以前に形成された町を再整備したもので、16世紀末～17世紀初頭には城下町の形成とともに既に屋敷の整備が行われている。これに対して米子城跡7遺跡は中海に一番近い2区では17世紀前半に既に屋敷が整備されているが、それ以外は18世紀になってから屋敷が整備されている。また、米子城跡8遺跡でも屋敷の整備が始まるのは17世紀後半～18世紀前半で、城下町の形成よりもかなり遅れて屋敷の整備が行われており、概して中海から内陸側へと屋敷が整備されていったものと考えられる。

米子城跡9遺跡では屋敷境界と考えられるSD-02、03、12から17世紀前半の遺物が出土していることから既に17世紀前半には屋敷が整備されていたものと思われ、中海から少し離れた場所にあり、しかも、調査地周辺の屋敷の整備が17世紀後半以降に始まるのに比べて早い時期

に屋敷の整備が行われている。

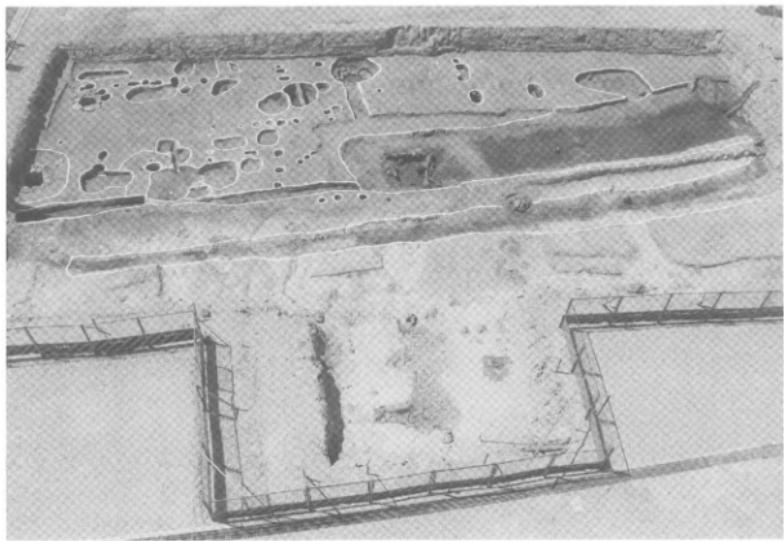
次に米子城跡9遺跡での屋敷の変遷を見てみると、17世紀前半～中頃には唐津が比較的まとまって出土しているが、17世紀後半～18世紀には遺物の出土量が少なくなる。このことは17世紀前半の屋敷の整備の後、17世紀中頃～後半には屋敷が廃絶もしくは空き家となったものと思われ、屋敷境界と考えられるSD-12、13の廃絶はこれに符合するものと思われる。また、幕末～明治になると再び遺物の出土量が増えることから幕末～明治にかけて再び屋敷の整備が行われたものと思われる。この他にも今回の調査では確認することはできなかったが、絵図から17世紀末～18世紀初頭、18世紀後半にも屋敷の変遷があったものと思われる。

近年の米子城跡の発掘調査によって城下町の形成と武家屋敷の整備の様子が少しづつではあるが明らかとなってきた。しかし、考古学的な調査と絵図とが一致しないところも生じてきており、今後は文献資料を含めた広い視野での調査、研究が必要となるであろう。

図 版



北西側調査区全景



南東側調査区全景

図版 2

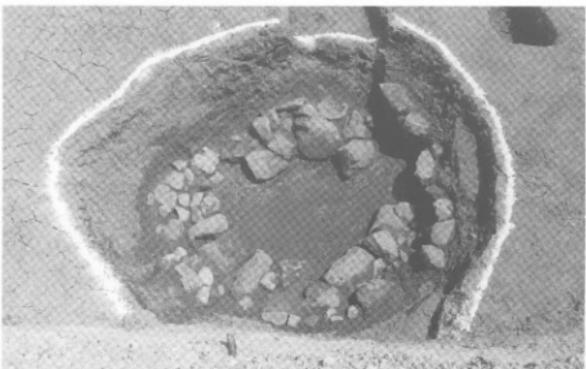
SE-01



SE-02

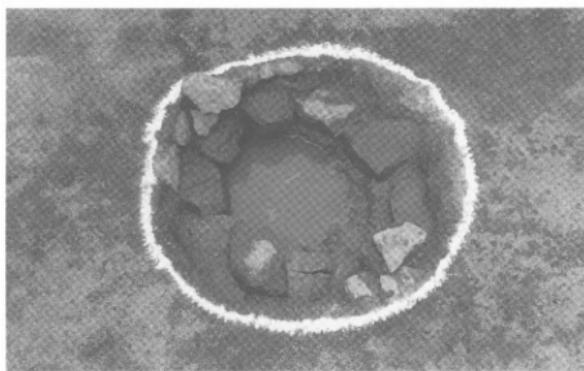


SE-03

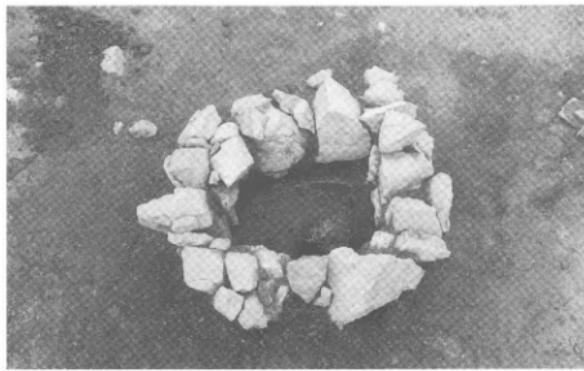




SE-04



SE-05

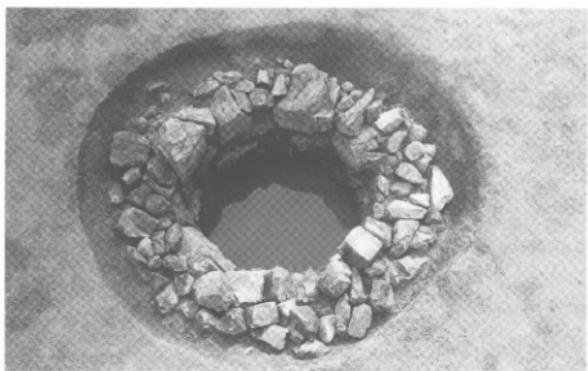


SE-06

図版 4



SE-07



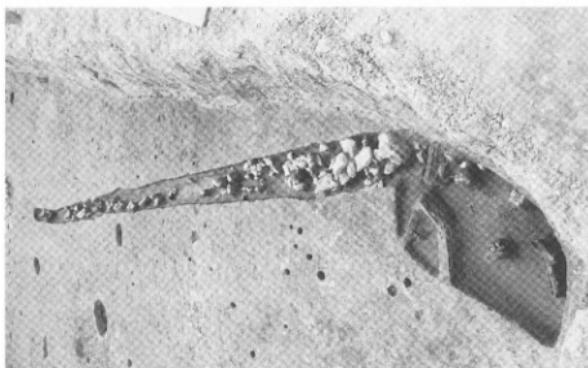
SE-09



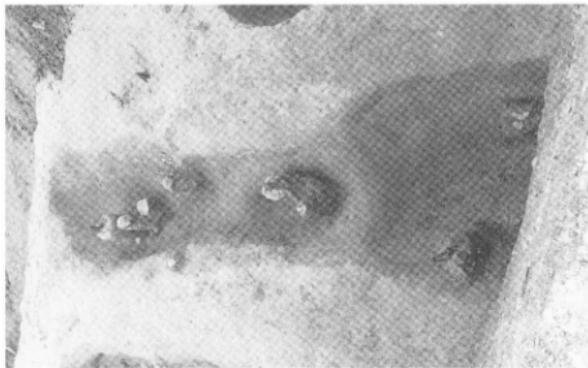
SE-10



SD-02 • 03 • 08

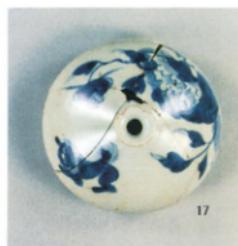
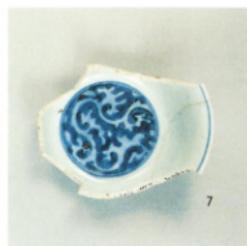
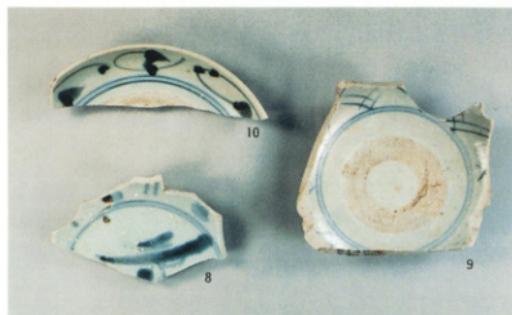


SD-12

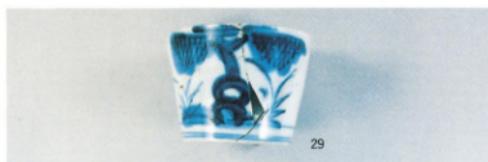
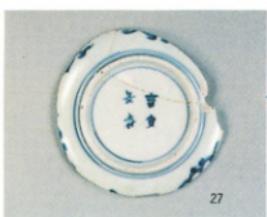
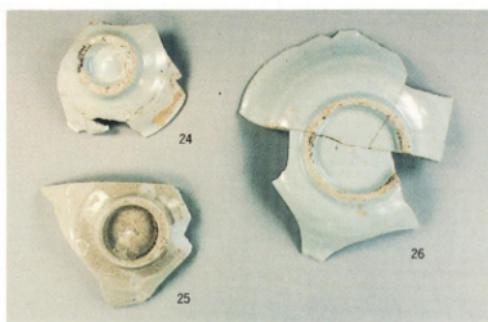
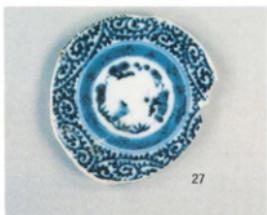
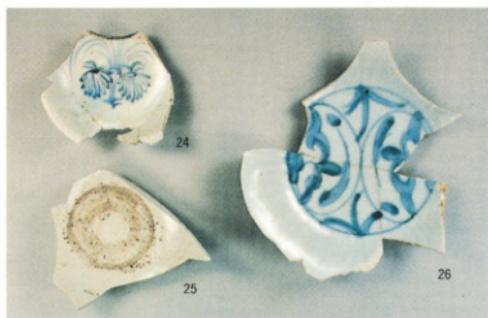


SD-13

図版 6



SD-03出土磁器



第2層出土磁器

図版8



SD-03出土陶器



54



46



48

47



45



51

50

52

53



44

図版10

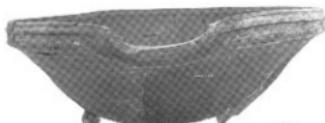
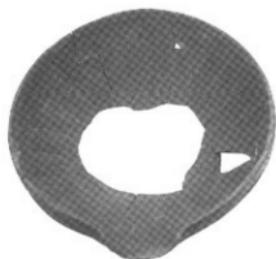


第2層出土陶器



第2層出土陶器

図版12



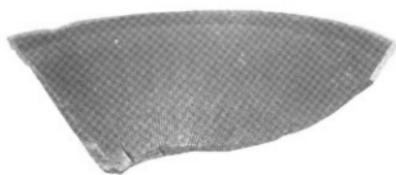
82



83



84



86



87

擂 鉢



90



94



93



98



101



103



105



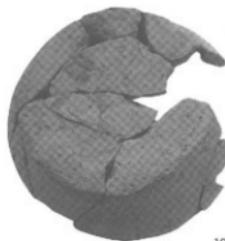
106



89



103



105

かわらけ・灯明皿

図版14



108



109



110



111



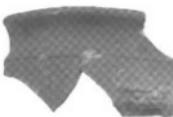
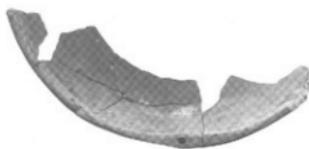
112



113



114

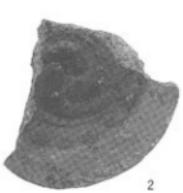


116



117

焰熔・瓦質土器



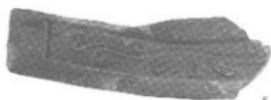
4



2



7



5



8



6

五

報告書抄録

ふりがな	よなごじょうせき 9いせき								
書名	米子城跡9遺跡								
副書名									
卷次									
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号	20								
編著者名	高橋浩樹								
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室								
所在地	〒683 福井県米子市中町20 TEL(0859)22-7209								
発行年月日	西暦 1997年 3月 31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因	
よなごじょうせき 9いせき 米子城跡9遺跡	とつとりけんよなごし 鳥取県米子市 かもちょう 加茂町	市町村	遺跡番号	31202	719	35度 25分 29秒	133度 19分 53秒	19950621~ 19951017	915m ² 変電所建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
米子城跡9遺跡	城下町	江戸時代	柵列、溝、 土坑、 井戸	陶磁器（肥前系、唐津、志野等）、 擂鉢（備前、唐津系）、培塿、 瓦、かわらけ、石製品（砥石、 碁石等）、金属製品（煙管、分 銅、古銭等）、木製品、漆器、 土鍾				屋敷の境界を示す溝 を検出。	

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 20

米子城跡 9 遺跡

1997年3月

編集・発行 財団法人米子市教育文化事業団

〒683 烏取県米子市中町20

印 刷 (有)米子プリント社